

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2021 年度)

提出日 2022 年 3 月 24 日

報告者 福留 東土

課題研究テーマ	大学教育・経営人材の育成とプログラム開発に関する研究
代表者 (所属)	福留東土 (東京大学)
メンバー (所属)	福留東土 (東京大学) 井芹俊太郎 (神田外語大学) 河本達毅 (桐蔭横浜大学) 木村弘志 (一橋大学) 戸村理 (東北大学) 蝶慎一 (広島大学) 中世古貴彦 (九州産業大学) 水野貴子 (東京大学) 栗原郁太 (東京大学大学院)
担当理事	鳥居朋子 (立命館大学)
コメンテーター (所属)	寺崎昌男 (東京大学・立教大学・桜美林大学 (名誉))
実施した活動	<p>今年度は課題研究としての活動初年度であり、メンバー間の議論を通じた課題認識の共有と議論の深化、およびメンバー以外の学会員等、関係者とのネットワーク作りに重点を置いて活動を行った。具体的に実施した企画は、学会大会でのラウンドテーブル、東京大学ホームカミングデーでの企画開催、課題研究集会での報告の3つである。</p> <p>①学会大会ラウンドテーブル企画「大学教育・経営人材と大学院教育」(2021年6月) 趣旨説明を行った後、本課題研究に連なる取組である東京大学ホームカミングデーでのトークセッションの実績について紹介し、昨年度のRTでの議論のまとめを行った。その後、大学院プログラム修了者としての経験とそれに基づく考察を行い、政策担当者、第三の職、教員、職員それぞれの立場に立った議論を行った。それらを受けて、出光直樹会員に指定討論を依頼した。昨年度のRTで寺崎昌男会員が提起された観点である、「大学院教育のミニマム・エッセンシャルズは何か」、「大学院教育と他の職員研修との違いは何か」、「専門性をどのように位置づけるか」という3点にわたってコメントを頂戴した。</p> <p>②東京大学ホームカミングデー・修了生×現役教員トークセッション「コロナ禍における大学経営・政策コース修了生の取り組み」(2021年10月) コロナ禍において大学の教育・研究のあり方が大きく変容する中で、大</p>

	<p>学経営に関わる教職員の仕事の仕方も変化を余儀なくされている。その中で、いかに業務遂行方の法を工夫しながら、大学の機能の達成・向上に寄与しようとする取り組みについて、大学院プログラム修了生の経験をもとにトークセッションを開催した。トークセッションは2015年度から開始して、今回が7回目であった。昨年度に続き、同じテーマで開催した。パネリストを5名依頼し、それぞれが、学修支援、国際化、遠隔授業・入学前教育のIR、人事、体育会という5つのテーマを立てて、各業務現場での経験に立脚した話題提供を行った。未曾有の困難を乗り越えようとする修了生たちの奮闘ぶりが如実に伝わる企画となり、参加者から好評を得た。</p> <p>③2021年度課題研究集会報告「大学教育・経営人材の育成とプログラム開発に関する研究」(2021年11月)</p> <p>課題研究1年目の活動報告を兼ねて課題研究集会での研究発表を行った。趣旨説明の後、4つの研究発表を行い、担当理事である鳥居会員、コメンテーターである寺崎会員に指定討論を依頼した。</p> <p>研究発表では、はじめに、修了者の観点からみた大学院プログラムのあり方について問題提起を行うとともに、本課題研究と関連するこれまでの取組の紹介を行った。続いて、大学院プログラム修了者の観点から見た大学教育・経営人材の専門教育についての考察結果を発表した。次に、大学職員研究の観点から、大学職員にとって業務外経験としての大学院プログラムでの学びが大学教育・経営人材としての成長にいかに関与しているかについて報告を行った。最後に、国際比較の視野に立ち、アメリカにおける高等教育の大学院プログラムに関するガイドライン作成の取組について検討を行った。これら報告を受けて、鳥居会員からは「大学構成員の多様性とプログラム開発の視点から」、寺崎会員からは「三つの論点について—修士論文・専門職化・カリキュラムのあり方—」と題したコメントが提起された。参加者からも有意義な問題提起を複数頂戴した。今後の課題研究の展開に活かしたい。</p>
<p>成果</p>	<p>本課題研究のテーマを構成する「大学教育・経営人材」および「プログラム開発」の2点に重点を置き、メンバー間の議論を深めることができたことが初年度の最大の成果である。議論の中から得られた知見としては以下の観点が挙げられる(仮説段階のものを含む)。</p> <p>① 大学院プログラムの効果は総じて高いが、政策担当者、職員、教員、大学外の人材など立場や仕事内容の違いによってその効果は異なる可能性がある。業務内容と学習内容の接点をどのように具体的レベルで探究していくかが今後の課題である。</p> <p>② 大学院修了者の数は増加しているとはいえ、現在でも大学職員や政策担当者のごく一部を占めるに過ぎない。意識と意欲の高い人材の能力伸長には寄与していると言えるが、高等教育の大学院や研修プログラムがより多くの人の関心を惹く存在となることが今後の重要な課題</p>

	<p>である。そのための本課題研究の役割を検討していく必要がある。</p> <p>③ 大学院プログラムの学びにおいて、特に論文執筆の経験は就学者にとって大きな比重を占める。この点について今後は、その過程でどのような能力の伸長が起こっているのかについてアプローチしたい。また、履修証明プログラムのように論文執筆を課さないプログラム、あるいは「研究成果報告」を課す大学院プログラムとの比較検討を行いたい。</p>
<p>残された課題</p>	<p>初年度の活動の成果を踏まえ、2022年度以降の研究課題は大きく3点にわたって挙げられる。①「大学教育・経営人材」に関わる定義と内容の考察の深化、②大学院プログラムのあり方(カリキュラム構築、対象人材など)に関わる考察の相対化、③大学院プログラムおよび教職員研修プログラムの国際比較、の3つである。また、議論に参加してもらう会員の拡充にも取り組みたい。</p> <p>2022年6月の学会大会では、上記のうち、主に②に焦点を当て、「大学教育・経営人材の育成を考える」と題したRTを開催する。複数の大学で展開されている大学専門人材の育成プログラムを取り上げ、人材育成においてどのような知識や能力を重視しているのか、どのようなタイプや志向を持った人々が受講しているのか、また、教育内容・方法の構築や改編の状況について話題提供を行う。同RTでは、課題研究メンバー以外の複数の会員・研究者に登壇を依頼した。</p>